

◆ 事業名 国宝・重要文化財の修理のための日本産漆の安定供給、特性及び評価

事業団体	日本漆アカデミー	■事業の目的
活用したふるさと文化財の森	弘前市有漆林、常陸大宮市家和楽漆林	ウルシ萌芽更新や植栽適地の研修会及び漆サミット2023を行うことにより、ウルシ生産の担い手育成や国宝・重要文化財修復の普及啓発及び日本産漆の特性と評価の情報共有を図る。
活用したふるさと文化財の森センター		
活用した文化財建造物	日光東照宮	

■事業の内容

(1) 日本産漆の安定供給に向けたウルシ萌芽更新と植栽適地の研修会

ウルシ生産の担い手育成に向けてウルシが萌芽している弘前市有漆林でウルシ萌芽更新に関する情報共有を図るため、ウルシ萌芽更新の研修会を10月27日(金)に弘前市有漆林で開催した。研修会では石川県農林総合研究センター林業試験場の小谷二郎氏が萌芽枝の特性や保育等を解説し、萌芽枝発生のための地拵えや萌芽枝育成等について情報を共有した。萌芽更新の研修会には喜多方市漆栽培振興連絡協議会やNPO法人丹波漆等から26名が参加した。

ウルシ植栽適地に関する情報共有を図るため、ウルシ植栽適地の研修会を11月2日(木)に常陸大宮市家和楽漆林で開催した。研修会では森林総合研究所東北支所の小野賢二氏がウルシ林造成に重要な植栽適地の土壤について土壤の見方を解説し、植栽適地等の土壤性状やウルシの根張り等について情報を共有した。植栽適地の研修会には林野庁やNPO法人壱木呂の会等から38名が参加した。

(2) 「国宝・重要文化財の修理のための日本産漆の特性と評価」と題した漆サミット2023

国宝・重要文化財修復の普及啓発と日本産漆の特性と評価の情報共有を図るため、「国宝・重要文化財の修理のための日本産漆の特性と評価」と題し、漆サミット2023を11月24日(金)～26日(日)に明治大学グローバルフロントとリバティーハウス及び日光東照宮で開催した。24日午前の開会式でNPO法人壱木呂の会理事長本間幸夫氏と日本漆アカデミー会長田端雅進氏が挨拶した。その後、東京藝術大学名誉教授三田村有純氏が「日本産漆の特性と可能性」、ザ・クリエイション・オブ・ジャパン(CoJ)専務理事兼事務局長岩関禎子氏が「日本の工芸を100年つなぐ一中間支援団体CoJと「漆」の可能性」の基調講演を行った。



萌芽更新研修会



植栽適地研修会



基調講演を行う岩関禎子氏



日光東照宮修理見学

◆ 事業名 国宝・重要文化財の修理のための日本産漆の安定供給、特性及び評価

昼食をはさんで「漆」をめぐる学際的な最新の研究成果等に関わる14件のポスター発表を行い、原木資源が少ない時代の漆搔き等について情報を共有した。午後、「日本産漆の特性と評価」に関わる講演を行い、明治大学名誉教授宮腰哲雄氏、選定保存技術保持者佐藤則武氏、NPO法人壱木呂の会理事長本間幸夫氏、彦十藤絵代表若宮隆志氏が日本産漆の特性や評価等を講演した。その後、森林総合研究所東北支所田端雅進氏の司会で講演者4名によるパネルディスカッションを行い、日本産漆の特性や評価法について情報を共有した。25日は午前に「明治大学と縄文時代の漆文化史研究」に関わる講演会を行った。講演会では明治大学文学部教授阿部芳郎氏が「縄文の漆器の魅力・考古学から」、明治大学黒耀石研究センター客員研究員能城 修一氏が「縄文時代の日本列島におけるウルシの存在」、明治大学理工学部専任准教授本多貴之氏が「縄文時代の漆文化を科学で見て分かったこと」を講演した。午後は「日本産漆を活用し地方創生を目指す」に関わる講演会を行い、輪島市産業部漆器商工課細川英邦氏が「輪島市における地方創生の取り組み」、会津大学短期大学部産業情報学科教授井波純氏が「喜多方・会津若松地方における漆資源を活かした地方創生の取り組み」、塩尻市副市長石坂健一氏が「木曽漆器の変遷及び環境と今後の展開」、岩手県商工労働観光部産業経済課地域産業課長金野拓美氏が「日本一の漆産地岩手県における地域創生の取り組みについて」を講演し、日本産漆を活用した地方創生の取り組みや今後の展開等について情報を共有した。26日、日光山輪王寺紫雲閣で選定保存技術保持者佐藤則武氏が「日光の修理で使われた漆」を講演した後、佐藤則武氏の解説で日光東照宮の修理見学を行った。今回の漆サミット2023に林野庁、岩手県、塩尻市等から190名が参加した。

■事業の成果

- ウルシ萌芽更新や植栽適地の研修会及び漆サミット2023を行うことにより、ウルシ造成に関わる萌芽更新法や植栽適地及び日本産漆の特性をウルシ生産者や漆塗り職人等に普及し、日本産漆の安定供給や品質向上に貢献できた。
- 修理された日光東照宮を見学した他、弘前市有漆林で萌芽更新を情報共有し、重要文化財修理やウルシ林造成の大切さ及び課題を学ぶことができた。

■事業の実施後の課題

- ウルシ萌芽更新や植栽適地の土壤及び日本産漆の特性をウルシ生産者や漆塗り職人等に普及できたが、漆増産に向けてウルシ林造成技術の普及や日本産漆の品質に関わる評価が喫緊の課題である。
- 漆サミット2023で重要文化財修理見学への参加者が少なく、一般の方等に修理への理解が十分に広まっていない。今後は一般の方等に重要文化財修理見学への参加を促す他、国宝・重要文化財修理のための講演や修理現場見学を行い、重要文化財修理の重要性を広める必要がある。

■今後の展開

- ウルシ生産者やウルシ林造成に関わる行政関係者等に対し、素材生産に関わる体系的な研修プログラムの研修会等を実施予定である。
- 日本産漆の持続的生産や素材利用の普及啓発のため、ウルシ林造成の研修会や講演会及び国宝・重要文化財の修理現場見学等を開催する予定である。

事業団体	特定非営利活動法人 文化遺産 保存ネットワーク河内長野	■事業の目的
活用したふるさと文化財 の森	岩湧山茅場	○修理用資材の確保に対する支援体制づくり
活用したふるさと文化財 の森センター	滝畠ふるさと文化財の森セン ター	○修理用資材に関する効果的な普及啓 発手法の開発
活用した文化財建造物	重要文化財 山本家住宅	○修理用資材の育成・採取・加工に関する活動 ○修理用資材の育成・採取・加工に関する担手の確保

■事業の内容

(1)「茅場環境整備実習」

■日時:令和5年9月3日(日)9時00分~14時00分

■会場:岩湧山茅場

■参加者:15名

■内容:集合場所から借り上げたタクシー、軽自動車に分乗して岩湧山茅場に向かった。茅山南側斜面裾部に到着後、10時頃より主催者挨拶、注意事項の説明。その後茅場山頂付近に場所を移し茅場の歴史的、地理的背景や保存、保全にかかる現状などの説明と茅場における灌木(主に萩類)伐採の意義と具体的な方法等を解説し、実習を行った。昼食を挟んで13時30分頃まで実習を実施。終了後下山して講評及び質疑応答の後午後2時過ぎに解散した。

(2)「重要文化財山本家住宅見学会と臨地講義」

■日時:令和5年10月22日(日)12時30分~15時30分

■会場:重文山本家住宅(大阪府河内長野市小深)

■参加者:28名

■内容:参加者は12時30分頃から約1時間、適宜、講師である中川等先生(NPO古材文化の会)の解説を受けながら自由に重文山本家住宅内外を見学。13時30分頃から住宅内において主催者挨拶の後、講師により「山本家住宅と大阪の民家」をテーマとして、主にPCプロジェクターを使用しながら臨地講義が行われた。講義は最後に2~3の質疑応答が行われ15時30分頃に終了し、主催者挨拶の後解散した。



「茅場環境整備実習」



「重文山本家住宅見学会と臨地講義」



「茅葺き実習」1日目



「茅葺き実習」2日目

(3)「茅葺き実習」

- 日時: 1日目 令和5年12月2日(土)13時20分~15時50分
2日目 令和5年12月3日(日)10時00分~15時40分
- 会場①滝畠ふるさと文化財の森センター 小屋組実物大模型周辺
②舟井家住宅茅葺き屋根葺き替え現場(大阪府河内長野市滝畠)
- 参加者: 延べ45名
- 内容: 1日目 令和5年12月2日(土)

滝畠ふるさと文化財の森センターの施設内に小屋組実物大模型を搬入設置し、その周辺を実習会場とした。参加者は、13時20分の主催者挨拶の後、茅葺きに使用する藁縄を製作するために講師である千早赤阪村で農業を営む木之本雅伸氏の実技指導の下、縫い易くするために藁を打ち、次いでその藁で縄を縫う実習を行い、各自1メートル以上の藁縄を縫った。

14時45分頃に縄縫い実習を終了し、参加者全員で近隣の明治後期に建築されたいわゆる滝畠型民家である舟井家住宅茅葺き屋根葺き替え現場まで移動し見学を行った。見学会ではご当主の説明を聞いた後、参加者を2班に分け、1班ずつ、施工する大西茅葺の大西謙之氏の先導で工事足場に上がり、大西氏他職人から説明を聞くなどして16時前に終了した。

2日目 令和5年12月3日(日)

2日目も1日目と同様、滝畠ふるさと文化財の森センターを会場として小屋組模型に茅を葺く技術を習得することを目的として、午前10時に開講した。講師は大西茅葺の大西謙之氏で、午前中は藁縄を使って、茅葺の下地材である竹を小屋組模型に結束するための縄結いを講師の実技指導の下、参加者全員が体験した。正午から約1時間の昼食休憩の後、午後からは、竹材が結束された小屋組模型に茅を葺く作業を講師の実技指導を得ながら参加者が実習した。15時30分には講習が終了し、講師の講評に続き主催者の閉会挨拶をもって解散した。

■事業の成果

- 修理用資材(茅・檜皮)の確保に対する地域での支援体制づくり

- 修理用資材の育成・採取に関する活動及び担い手の確保

まだまだ、不安定要素があるものの茅採取の人員が確保されており、また、茅場保全の山焼きも行政のサポートを受けながら地元が中心となった実施体制が整ってきた。

- 修理用資材(茅・檜皮)に関する効果的な普及啓発手法の開発

座学→見学→体験→振り返りを基本的な学習プログラムとすることにより、参加者の理解度が深くなっている。

■事業の実施後の課題

今回も参加者自らが作業体験する事業であることから、安全面の確保をどうするかが課題である。単に保険に入っていれば良いという問題ではなく、どこまで安全面を配慮して参加者に満足してもらえるかを考慮し、今年度4回目に予定していた「茅刈り実習」を安全面(緩斜面の確保)の理由から中止せざるを得なかった。

■今後の展開

茅採取従事者の育成あるいは植物性資材としての茅の重要性、茅場の保全維持を啓発する事業を進めてきたが、茅採取と茅場維持が安定的に進められるようになり、「茅刈後継者養成講座」は今年度をもって最後とする。

檜皮葺きは茅葺きとは違い社寺建築に用いられることが多く、茅葺きほどは身近には感じにくいものであることから、今後は、境内林や檜皮葺建物などを用いて主に檜皮の普及啓発事業を進めたい。

◆ 森が支える日本の技術 2023公開セミナー

事業団体



公益社団法人
全国社寺等屋根工事技術保存会

活用したふるさと文化財 の森センター

京都市文化財建造物保存技術研修
センター

活用した文化財建造物

清水寺(境内)
日吉大社(境内)

■事業の目的

檜皮葺や柿葺、茅葺など古来から伝わる伝統的屋根工事技術は我が国が世界に誇る文化であり、これらの技術を後世に継承することが伝統技術を保存する団体としての責務だと考える。そのためには、より多くの国民の理解を得るために知ってもらうことが重要です。文化財建造物保護のために必要な植物性資材の材料作成及び使用方法(技術)や人材(技術者)の育成を中心に保存技術について広く一般の方々を対象に普及啓発を図り、当該事業を通じ、文化財保護における資材・技術の重要性と、知識の習得の場を提供することを目的とする。

■事業の内容

(1)開催プログラム

1 檜皮採取実演：一般参加者対象

日 時：令和5年11月25日(土)10:00～15:00
場 所：日吉大社 境内林(滋賀県大津市坂本5-1-1)
内 容：当会檜皮採取指導者による技術の実演
協 力：日吉大社



檜皮採取実演

2 資材確保への取組(パネル展示)：一般参加者対象

日 時：令和5年11月3, 4日(金祝・土)9:30～16:00
場 所：京都市文化財建造物保存技術研修センター
内 容：(公社)全国社寺等屋根工事技術保存会がこれまで行ってきた資材確保の取組とその資材の重要性を紹介。



パネル展示

3 資材を育む研修(森林整備:除伐)：文化財修理経験者及び一般参加者対象

日 時：令和5年12月8日(金)13:30～15:00
場 所：嵐山国有林(京都市右京区)
講 師：林野庁 近畿中国森林管理局 京都大阪森林管理事務所
森林管理官3名
内 容：人と自然が作り出す四季折々の野山を広く世界の方々に楽しんでいただくため、紅葉する木を育てる。下草・雑木を刈り、風通しの良い環境を作り、木の育成をするために管理・維持していくことの意義を学ぶ。



森林整備:除伐

4 文化財講座：文化財修理経験者及び一般参加者対象

日 時：令和5年11月3日(金祝)10:30～12:00
場 所：京都市文化財建造物保存技術研修センター
講 師：西川 英佑 氏
内 容：「建築構造学からみた我が国の伝統的木造建築」



文化財講座

(2)「未来につなぐ匠の技」～伝統的屋根工事技法の紹介～

植物性の資材で葺かれる伝統的建造物を支えるための技術を紹介

日 時：令和5年11月3, 4日(金祝、土)9:30～16:00
場 所：清水寺境内特設テント
対 象：文化財修理経験者及び一般参加者
内 容：檜皮葺とその材料成型、茅葺実演

◆ 森が支える日本の技術 2023公開セミナー

(3)リーフレット等広報物の配布

本年度はコロナ禍前の状況にほぼ戻りつつあることから、国内外からの多くの旅行者が予想された。国内の観光客のみならず外国人も対象に日本語版と外国語版のリーフレットを配布。さらに会場内にモニターを設置し、技法紹介のDVD上映も行った。



(4)SNSを利用した広報の実施

SNSを活用し、各種プログラムの広報にネット媒体を使用することで、文化財に関心をもつ人材の掘り起こしと、文化財を後世に残すための技術と資材確保のための取り組み、その活動の重要性を一般の方々に紹介した。

清水寺境内特設テント

■事業の成果

今年度はコロナ禍前と同じような状況の中で実施することができた。近年稀にみる海外からの観光客の数で、日本人観光客のみならず多くの外国人にも見学していただいた。檜皮葺、柿葺、茅葺という日本の伝統文化を知り、体験していただくことは大いに意義のあることだと感じた。

檜皮採取の実演もまた、大変意義のあるものとなった。実際の作業を目の前で見るということは迫力があり、より記憶に残るものと思われる。地道な手仕事や繊細な作業、目を見張るような技、このような技術があるからこそ文化財が維持されているということを広く知って頂くために、今後もこの事業を継続していきたい。

■事業実施後の課題

(1)プログラムの内容について

今年度は久々に茅葺の実演を行った。多くの人が知る茅葺だが間近で見る機会は少ないので、多くの方々が興味深そうに見学されていた。また、竹釘打ち体験は昨年度同様、非常に好評で年齢性別を問わず多くの方々に参加していただけた。次年度以降もこのように参加者の興味を引き、記憶に残る内容を実施していきたい。

(2)場所の課題について

観光客も多い京都近郊で事業が行われることは今後も望ましいが、それ以外でも神社仏閣に限らず観光客の多く集まるような場所で行うことも視野に入れておきたい。

(3)広報の課題について

SNS等を使った広報の効果も多少感じられるようになってきた。多くの方々の関心を得るための手段を考えながら地道に取り組んでいきたい。従来のポスターや紙面での広報も少なからず効果はあるので引き続き行っていきたい。

■今後の展開

来年度以降も変わらずこの事業を続けていく上で、新たな魅力のある実演や体験の模索、時代の流れに即した発信の仕方等を考えていく必要があると考えます。このような活動を継続してしていく上で少しずつではありますが、我々の仕事に対する認知度を向上させ、日本の伝統文化の素晴らしさを国内外に広めていきたいと考えます。

◆沖縄の茅(リュウキュウチク、チガヤ)の育成・採取・加工と茅葺きに係る普及啓発事業

事業団体

一般社団法人日本茅葺き文化協会

■事業の目的

- 修理用資材の確保に対する支援体制づくり
- 修理用資材に関する効果的な普及啓発手法の開発
- 修理用資材の育成・採取・加工に関する活動
- 修理用資材の育成・採取・加工に関する担手の確保
- 修理用資材の育成・採取・加工に係る他組織との連携、情報共有

■事業の内容

(1) 茅(リュウキュウチク、チガヤ)の育成・採取・加工等の研修プログラム

①茅刈り体験研修 日時:令和6年1月27日(土) 会場:国頭村のリュウキュウチク、チガヤの茅場 参加者:24名
参加者は10都府県から建築関係者や地元住民が中心で平均年齢は40歳であった。長年茅葺き、茅刈りに携わる地元の講師から、リュウキュウチクとチガヤの両方について、良い茅の見分け方、刈り方、束ね方、運搬や、選別方法まで教わった。チガヤは80cm以上の長さのものを刈り取る。ある程度ゴミを取り除いて軽く結束。もう一度丁寧に選別をして茅ごしらえする。地域に古くから残る神アサギの見学も行った。

②-1茅葺き体験研修 日時:令和6年1月28日(日) 会場:海洋博公園おきなわ郷土村 参加者:26名
海洋博公園おきなわ郷土村に復元された与那国の民家の葺き替え現場にて、リュウキュウチクとチガヤの茅葺き体験研修を行った。参加者は棟仕舞、平葺き、差し茅、の作業を順に行つた。棟仕舞はマジンガヤ(棟積み茅)をチガヤのアンダガヤ(油茅)で包み、イリチャーダキ(竹簀)で包んで縄で締め固めた。平葺きは、葉先を下にしたりゅうキュウチクで葺いていく。神アサギでは傷んで抜けている部分にリュウキュウチクの差し茅を行つた。

②-2茅葺き技術研修 日時:令和6年1月29日(月)・30日(火) 会場:海洋博公園おきなわ郷土村
参加者:7名(+オブザーバー参加10名)

中級の茅葺き職人を対象に、地元の職人らと共に茅葺き技術研修、技術交流を行つた。参加者は、本土の笹葺き経験のある京都、兵庫の職人や、熊本の職人ら7名。棟仕舞とクバの壁、戸づくりを行つた。棟仕舞はマジンガヤの上にアンダガヤを被せる。その上からイリチャーダキを被せて、ジーフー(笄)から取つた縄で緊結する。クバの壁は下地の竹に10cm間隔で1枚ずつクバの葉を結びつけ、インジャダキ(ホウライチク)を竹簀状に編んだもので押さえる。戸はクバの葉5枚10列にきれいに並べ、両面から竹で挟んで針で縫い合わせてつくる。

③茅の育成・採取・加工等に係る講義

(1)茅葺き文化講座1 日時:令和6年1月27日(土) 会場:道の駅ゆいゆい国頭会議室 参加者:30名

(2)茅葺き文化講座2 日時:令和6年1月28日(日) 会場:海洋博公園海洋文化館2階ステージ 参加者:35名
茅刈り体験研修とあわせて、大城盛雄氏「やんばるの森と暮らし」、国頭村森林組合の賀数安志氏「リュウキュウチクとチガヤの現在の利用と維持管理」の講義を、茅葺き体験研修とあわせて、宮平設計の中本清氏「沖縄の茅葺きの材料と特徴」、「戦後復興の応急茅葺き規格住宅」沖縄琉球赤瓦漆喰施工協同組合の田端忠氏「沖縄のかや建築」、中村工務店の中村博志氏「奄美の茅葺きの材料と技能」の講義を行つた。

(2) 茅(リュウキュウチク、チガヤ)の育成・採取・加工等に係る教材の作成・配布

沖縄のリュウキュウチクとチガヤの茅刈りと茅ごしらえ、茅葺きの軒付から平葺き、棟仕舞およびクバの壁と戸づくりの記録を行い、それらを「沖縄の茅(リュウキュウチク、チガヤ)の茅刈りと茅葺き」として記録映像を作成した。これらを、ふるさと文化財の森選定地のほか、沖縄の各市町村、教育委員会、図書館、沖縄建築士会、茅葺き職人連合、国際茅葺き協会等に配布するとともに、ホームページ等で広く公開した。



茅刈り体験研修(リュウキュウチク)



茅刈り体験研修(チガヤ)



茅葺き体験・技術研修(棟仕舞)



茅葺き技術研修(クバの戸づくり)

◆沖縄の茅(リュウキュウチク、チガヤ)の育成・採取・加工と茅葺きに係る普及啓発事業

■事業の成果

(1)茅採取:チガヤは沖縄ではマカヤと呼ばれ、茅葺きの下葺きや棟仕舞に利用されている。

1 チガヤの茅場:チガヤは、現在はまとまった茅場は失われ、道端や畠の畦や林道脇、公園や運動場の広場の縁に自生しているものを探取している。

2 チガヤの採取:チガヤの刈り取りの適期は10月～12月頃で、長さ80cm以上のものを刈り取る。成長して丈が伸びて頭が垂れてくるのが刈り取り時期の目安。根元を揃えて1束が直径80cm程度になるように束ね、その茅を風通しのよい日陰に立てて乾燥保管する。

3 チガヤの茅ごしらえ:刈り取ったチガヤの束を屋根葺き用に選別加工する。ひとつかみの束をとり、根元に混じった雑草を手でそぎとり、根元を揃えながら台の上に置き、それを繰り返して直径20cmの束に束ねる。

(2)茅葺き 棟仕舞:棟に使うチガヤは特に長くて上質のものを用いる。短いものは下葺きに用いる。

1 マジンガヤ 棟積み茅:屋根の葺きおさめには、リュウキュウチクを用いて高さ60cm程の半円形に積み上げる。

2 アンダガヤ:棟を包む茅(みの茅)をアンダガヤ(油茅)と呼ぶ。アンダガヤは、チガヤを直径2cm程度の小束にし、それを太めのリュウキュウチクの芯竹に縄で編みつける。

3 イリチャーダキ 竹簀巻き:あらかじめ簀の子状に編んだイリチャーダキをアンダガヤの上に被せて棟を包む。ジーク(笄)からとった縄と針金でしっかりと留めつける。

(3)クバの葉の壁と戸つくり:クバの葉という沖縄特有の植物資材を用いて、台風に耐える堅牢な長持ちする壁と戸をつくる技術を再現し体験できた。茅葺き職人や一般の市民、学生たちの誰でもできる技術であり、特別な道具もなく、丁寧な作業の繰り返しによってできる。維持管理も容易にできることも体得できた。

(4)南西諸島の茅葺きの特徴 奄美と沖縄の共通点と相違点

奄美諸島では、まずチガヤを下葺きとして逆葺きに葺き、その上にススキを逆葺きとして葺き重ねる方法が一般的である。チガヤが主として雨仕舞いの役割を果たし、その柔らかいチガヤを守るように太くて丈夫なススキを葺き重ねて台風に対処している。沖縄では、ススキの代わりにより丈夫なリュウキュウチクを用いている。チガヤの役割は両者に共通するものである。降水量の多い南西諸島では、細く柔らかいチガヤが、雨仕舞上重要な役割を果たす貴重な茅葺き材料であることがわかった。

●南西諸島では、茅葺きの継承が危機的状況にあり、職人の後継者育成も困難な状況である。今回の体験研修によって、奄美、沖縄両地方で技術を共有し、交流をはかり、本来この両地方では、住民の互助(ユイ)で葺かれていたので、今回のような地域住民や一般市民の参加による屋根葺きの方法も、茅葺きの技能を継承し知恵の共有をはかる上で大きな成果があった。

■事業の実施後の課題、今後の展開

1 リュウキュウチクとチガヤの茅場整備

●リュウキュウチクの茅場は、世界遺産やんばるの森の環境整備の一環として林道脇に茅場がかろうじて残り、それを毎年採取することで、持続的な生産が可能となっている。人の手が入らなければリュウキュウチクの植生は森に遷移していく。このことを理解した上で、リュウキュウチクの安定的持続的生産のためには、世界遺産やんばるの森の地域の中に、リュウキュウチクの茅場の必要性、リュウキュウチクを利用した地域固有の文化、その歴史的文化的な意義の正しい理解を得て、ふるさと文化財の森への選定が望まれる。そのことによって、地域住民の沖縄の茅葺き文化継承への意識を高めることも期待できる。

●チガヤについては、現在まとまった茅場は消失しており、道端などに生えているチガヤを刈り集めて間に合わせている状況である。今後、沖縄の茅葺きを継承するためには、チガヤの茅場の整備が急務である。

今回の体験研修によってチガヤの必要性が再認識され、おきなわ郷土村では園内のチガヤ自生地を茅場として拡大整備される予定である。

2 職人の技能継承

沖縄の茅葺きは、地域の神アサギやおきなわ郷土村などに残された民家に限られており、職人が技能を継承する機会が極めて少ない。20～30年に一度の葺き替えではなく、部分的な修理や差し茅など定期的な補修を行うことで、2～3年の周期で職人の技能継承の機会をつくる必要がある。そのことは、茅の持続的な生産および茅場の維持管理にもつながる。